

蝶の博物詩

生態39

渡り



アサギマダラ (左下の蝶の翅にマーキングがある)
(2005年12月1日 竹富島)

photo by

Nishiyama



ウラナミシジミ
(2008年10月15日 鎌倉)

蝶の博物詩

生態39

渡り

1996年、日本の最西端の与那国島でバッタの大群に遭遇した。島の中央の草原で、行く手に褐色の動く物体が見えた途端に、車に激突する音がしばらく続き、去って行った。アフリカを発って大西洋を渡るサバクトビバッタなどと比較にならないが、小規模の飛蝗といってよいだろう。その10年ほど前、種子島の近くの無人の馬毛島におけるトノサマバッタの大発生を思い出した。生息数が増えると形態的にも生理的にも、孤独相から群生相に変化する。蝶では形態学的変化はおこらないが、種族が生きるために海を越えて大移動することが知られている。

馴染み深いモンシロチョウは源をヨーロッパに発し、シルクロードを経由して中国に達し、渤海を渡って朝鮮半島、次いで日本に群をなして飛来したという説が、種々の目撃例から真に近いと思われる。モンシロチョウの食餌の大根は弥生時代から栽培されていたので、2000年前から日本で飛んでいたかもしれない。モンシロチョウの大集団は戦後(1955年5月)、鹿児島県志布志町(当時)の海上で目撃されたが、以後減少、衰退するばかりである。なお沖縄や南西諸島に現れたのは1958年以後のことである。

1995年、モンシロチョウより一廻り大きなオオモンシロチョウ(本誌31巻12号)がロシアの沿海州南部で大発生し、日本海を越えて北海道西部や青森県に飛来した。しかし往時のモンシロチョウのような白い雲の如き大集団ではなかったらしい。アブラナ科栽培植物の害虫であるので、農薬でその繁殖が抑えられているようである。

日本中どこにでもいる美しいアサギマダラ(本誌17巻11号)は長距離の渡りをする蝶として有名である。大きな群れとならず、ばらばらに飛ぶ。春から夏にかけては南から北へ、秋には逆に南方に向かう傾向がある。石垣島でたまたま撮った写真をあとで見たとこ、翅に文字が印されていて、本土から放たれたものであった。このマーキング調査は最近流行しているが、回収率はよくないらしい。遠く飛んだ例として、和歌山県から香港まで、2,500 kmを83日間で飛行した記録が新聞に載っていた。単独飛行の目的は何か、また夜間はどこで休んでいるのか、まさか中国や台湾の漁船の上ではないと思うが、不思議なことが多い。

かつて“さまよえるウラナミシジミ”と呼ばれた小さなシジミチョウがいる。裏面にさざ波状の模様があり、オスの表面はコバルト色に美しく輝く。毎年、晩夏から初秋に、赤いケイトウの花にやって来るが、本州の暖かい南の海岸線付近でないと越冬できず死滅する。翌春、越冬地から南西季節風に乗って徐々に北方に分散、東北地方から北海道まで1,000 km以上、世代交替をしつつ、移動するようである。ウラナミシジミの故郷は冬の平均気温7℃以上で、食草のマメ科植物の花が咲く温暖地と推定される。秋の彼岸のころ、また逢いたいと願っている。

西山茂夫